

教会が教会であるために

コリント第二 8:1~7

今日の聖書箇所のパックグラウンドを話しておきます。それは困窮の中にあるエルサレムの教会支援のための募金に関連することでした。コリントの教会が様々なことに恵まれた教会であるにもかかわらず、この募金について非常に消極的であることからパウロはかなり厳しい指摘を記した手紙をコリントの教会に送ります。その結果、コリントの教会は悔い改めたことをパウロは知り、この募金に関するマケドニアの諸教会の信仰の証しもこの手紙で知らせたということです。マケドニアの諸教会とは聖書のこの後に出てくるピリピ、テサロニケ、ベレアといった教会でギリシャにあります。またコリントは近くにアテネがあってこれらもギリシャにありマケドニアの南に隣接したアカイア州にあります。この箇所にはエルサレム教会への支援のことが書かれているのですがパウロは単なる募金のアピールとしては記していません。表面的には募金活動ですがそれに終わらずこの募金活動を教会としてどのように理解し、受け止めることが出来るかがこれからの教会の成長に大きく影響を与えることをパウロは教えようとしています。一つの例はこの箇所では「献金」「募金」といった直接的に経済支援を表すことばは用いられていません。お金の話をそのまま出すのをためらったり、気遣っているのではありません。それは募金、献金ということを経験に基づいて応答することを願ったことでした。またエルサレム教会はユダヤ教の中心地エルサレムにあるわけですのでほとんどが改心したユダヤ人ですが、パウロによって小アジア、そしてマケドニアと異邦人の世界に福音が広がり教会が生み出されています。つまりキリストの福音は全世界全ての人の救いのためであり、この募金はユダヤ人と異邦人が主キリストにあって「一つの民」とされていることを証しする重要な機会としてパウロは見ているのです。

さて教会とはどういう存在でしょうか？ キリスト教会と他の団体とは何が違うのでしょうか？

いろんな表現があるでしょうがパウロは今日の箇所を通じて教会とは「共に神に仕え、共にキリストの豊かさを味わうところ」と言っています。もう少し短く言うなら「奉仕によって十字架の恵みを知るところ」と言えます。奉仕とは神に仕えることですがパウロはエルサレムへの募金あるいは献金を4節で「聖徒たちをささえる奉仕」、6節では「恵みのわざ」と言っています。つまりマケドニアの教会にとって献金とは奉仕のことであり、献金によって神に仕えていると言ったのです。当時のマケドニアの教会の生活状況は2節にあるように「極度の貧しさ」の中がありました。これはどん底状態であり、それほどの貧しさですからエルサレム教会を助けてあげたいと思っても、何かを抛出できるようなものは何も無い状態であったのです。しかし結果的にはそんな中であっても満ちあふれる喜びは激しい試練の中にあってもあふれ出ていたというのです。彼らに満ちあふれる喜びを与えたのは誰でしょうか？ それは主イエス・キリストです。9節に「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」とあります。どんなに私たちが試練や困難の中に置かれても、キリストを信じ、委ねるなら神は私たちに富む者としてくださるのです。キリストを信じ、委ねるとはどのようにすることでしょうか？ それは5節にあるように「自分自身を主に献げる」ことです。

そのマケドニアの諸教会の人たちの献金という奉仕に対する向き合い方はどのようなものだったでしょうか？それは3節にあるように「自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ」たということです。

まず「自ら進んで」これは自主性、自発性ということですが献金も含めて奉仕も信仰生活も基本はそれ

ぞれの自主性、自発性に則ったものです。教会の事柄で強制的にあるいは強いてやらされるものは何もありません。基本的には自由です。ただパウロは自主性という時にもう少し深い意味を込めて言っています。自主性と言われているもともとのことばは「選ぶ」「選び取る」という言葉です。やってみたいから、面白そうだからということが自主性につながりますが気分的なことではなく、選び取っていくわけですからそこには責任を伴います。私たちも日常の中で選び取りながら日々生活していますが一般的には損か得かがその基準になります。そして多くの場合、少しでも得になること、損をしないことを選ぼうとしています。しかしマケドニアの教会の人たちは得よりも損を選んだと思います。なぜなら厳しい状況に置かれているわけですからそこでさらに捧げることは損になるはずですが、しかし、彼らはそうすることがキリストにあって繋がる最高の機会であると知っていましたし、そういう時にこそ神は働いてくださることを確信していたのです。みなさん、信仰者にとって神が今も生きて働いておられることを経験できる機会はそうあるものではありません。

つぎに「力に応じて」ということです。私たちが持っているもの、与えられているものは多い少ないに関係なくすべて神様が与えてくださっているものです。賜物と言いますが広い意味では私の身体、時間、いのち、自然環境などすべては神によって創造され、維持されています。また狭い意味においては人によって異なる才能や力が与えられています。「力に応じて」とは自分に出来る範囲で精一杯ということですがここで大切なのは賜物は他の人に用いるために与えられているということです。ペテロ第一 4:10には「それぞれが賜物を受けているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合いなさい。」とあります。そんな賜物、私には何もありませんという人がいます。本当にそうでしょうか？ 誰かのために祈る時間はありませんか？ 大きなことは出来なくても小さな助けなら出来ることがあるかもしれません。元気のない人に一声かけてあげることは出来ませんか？ 声をかけてもらったり、何かしてもらったらありがとうと返事することは出来ませんか？ いろいろと出てくると思います。ですから人の賜物を羨むよりも、自分に与えられている賜物をどのように用いたら良いかと考えたほうが良いのではないのでしょうか。

そして三番目に「力以上に」ということです。ここでは文脈上献金なり義援金を捧げることが言われていますが何か祈っていたら特別な富や財が与えられたということではありません。マケドニアの教会は極度の貧しさ、苦しみにによる激しい試練の中にあるわけですからどんなに頑張っても客観的に捧げるものは若干増えたとしてもそんなに大きなものではなかったでしょう。しかし、パウロが彼らから学んだことはそのような絶望的な状況の中にあっても、心の中には満ち溢れる喜びがあったということです。誰がその喜びを与えてくれたのでしょうか？ それは主イエス・キリストです。同じ手紙の 12:9 に「わたし（キリスト）の力は弱さのうちに完全に現れる」とあります。能登半島地震による被災者のために毎日祈っておりますが29年前西宮市におりました時に阪神大震災で被災しました。住んでいた家の周りの同じ木造2階建ての建物は皆一階が崩れた光景は今でも忘れられません。よく生きていたなど事あるごとに思い返します。教会関係でも多くのボランティアの人たちが来てくれました。でもボランティア奉仕を終えて帰る時にその人たちが不思議と同じことを言われました。「来るときには助けよう、手伝おうと思っていただけど、帰る時には自分たちの方が慰められ、恵まれた」と。私たちは助けてもらおう側ですから何も与えるものが無いはずなのに助けに来てくれた人は神に豊かにされて帰ってゆく。これこそ奉仕を通して得るキリストの恵みなのではないのでしょうか。

最後にパウロはコリントの教会の成長を願ってお奨めをします。まず何よりも神のみこころに従うよ

うにということです。5節に「神のみこころにしたがって、まず自分自身を主に献げ」とあるようにマケドニアの教会の人々は神様の導きに素直に応答できるようにしていたのです。自分自身を神様に用いられやすい状態にしておくということです。いろんな計画を私たちは立てますが神の声と導きを示されたなら素直にそれに従うということです。

次に教会が成長するためにはさらに何が必要かと考えることです。パウロはコリントの教会自体を批判したり、叱責しているわけではありません。むしろ7節「あなたがたはすべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、私たちからあなたがたが受けた愛にもあふれています。」とあるようにコリント教会の良さを認めています。それは嫌味でも何でもありません。ただパウロはそこまでコリント教会が豊かであるなら、この恵みのわざ（つまり募金、献金）においても豊かに応答できるはずだと言っているのです。

さて豊かな教会とはどのような教会のことを言うのでしょうか？ 人数が多く会堂施設等が充実していることでしょうか？ 経済を含め、あらゆる必要が満たされているということでしょうか？ そうではなくマケドニアの諸教会のように厳しい状況の中に置かれても主キリストによって満ち溢れる神の恵みを体験している人がどれぐらいいるかにかかっています。